

医療品など調達困難

ネパール救援の成沢さん帰国報告

大洪水のつめあとと生々しく

ディネーター、成沢貴子さんによれば、災害後一カ月を経過しても道路寸断など洪水のつめあとは生々しく、厳しい状況の中で医療救援を展開している。

一行は成沢さんと立正佼成会岡山教会、ネパールやぎの会の関係者ら計四人。チームでは、ネパールだけ

で二千人以上の死者を出した洪水発生直後の七月末、A.M.D.A医師二人を派遣。インドとの国境に近い南部のサライ地区で、現地の医師とともに住民の診療にあっている。

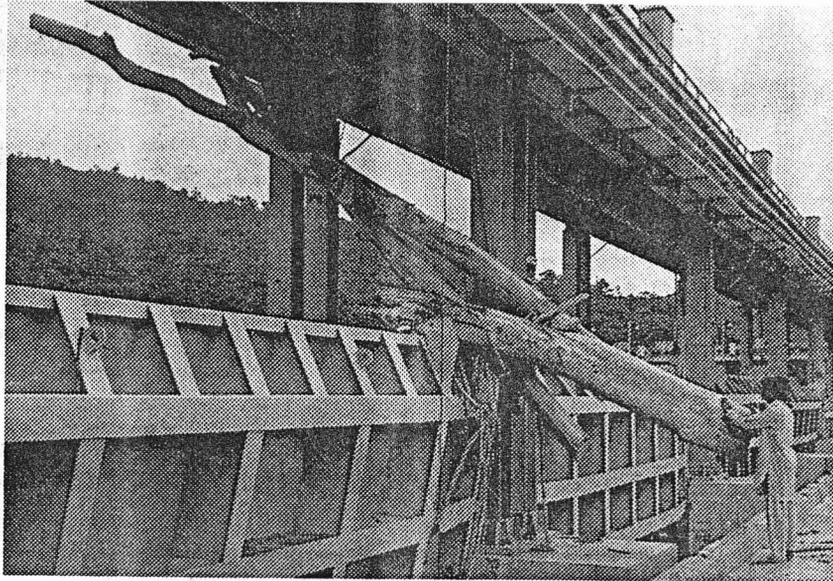
成沢さんらは同地区を流れるバグマティ川沿いに車で巡回。特に同川上流の村の被害が大きく、豪雨で増

えた川の水があふれ、人や家、家畜などが多数流出。成沢さんらは家が屋根まで砂に埋まっていたり、水門に巨大な流木が引っかかっているのを目撃した。

先発隊の医師らは地区の学校などを拠点に被災者への診療や子供たちへの衛生指導を繰り返している。一日平均約二百人の外来患者があり、ほとんどは肺炎などの呼吸器疾患や下痢。心配されたコレラ発生はないものの、道路の寸断やぬかるみで車が通れない所もあり、医療品などの調達に困難をきたしているという。

チームは現地に医師らが残り、十月末まで救援活動を行う。成沢さんは「現地の保健スタッフや住民への衛生教育に力を入れ、近く第二便の救援物資を送りたい」と話している。

バグマティ川の水門。引っかけた巨大な流木が、洪水のすさまじさを物語る。救援チームの医師撮影



大洪水の被災者救援のため、八月二十六日からネパールを訪れていた岡山市内のNGO（非政府組織）で組織する「大洪水被災民救援チーム」がこのほど帰国した。メンバーのアジア医師連絡協議会（A.M.D.A）

本部・岡山市檀津二コー